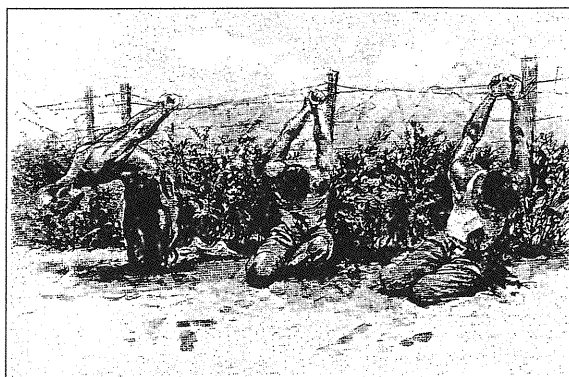


綱引きする「戦争責任」

— オランダのある新聞記事をめぐって —

荒 野 泰 典

トロウ 2000年8月12日(土) 15頁



「歴史的」ではないとして拒否された絵
(ニオッド所蔵：本文113頁参照)

一、はじめに

オランダの日刊新聞トロウの在日通信員デットレフ・ファ
ン・ヘイスト(以下「デット」と呼ぶ)から電話があつた
のは、八月はじめのことだった。デットは、ややこころも
とない日本語で、日本の戦争犯罪や戦争責任について話が
聞きたいので、会ってくれないかと言う。

太平洋戦争の際日本はオランダの植民地であつたインド
ネシアを占領し、軍政下に置いた(一九四二―四五年)。そ
の時に強制収容所に入れられ、あるいは、従軍慰安婦とし
て働かされて、肉体も精神もともに、癒しがたい傷を負つ
たオランダ人たちがいた。そのために現在でもオランダで
は八月十五日に近くなると、ナチから解放された五月の時
期とともに、かならず、マスコミなどによってこの問題が
取りあげられる。オランダに滞在している日本人は、その

時期には、なんとなく外出を控えめにするようになることが聞かれたことがある。私も、海外研究で一九九五年から九六年にかけてオランダに滞在した時に、この時期にマスコミを中心にオランダの雰囲気が変わるのを感じた。かつての戦争は、まだ終わっていないのだと、痛感させられるできごとだった。オランダに行くと言った時に、よく「対日感情」はどうなんですかと聞かれることがあるが、そういう質問は、おそらく、その辺の事情にもとづいているのだろう。オランダには家族とともに住んだのだが、親族たちが心配したことの一つも、また、この「対日感情」だった。

デットの用件を聞いた時に、まず、私は、このようなことを考えた。しかし、私は、オランダとの国際関係も研究対象にしてはいるものの、あつかう時期は近世なので、このテーマでインタヴューを受けるにはふさわしくないのではないか。それに、このテーマでは、同僚に栗屋憲太郎という世界的に知られた研究者がいるので、ひよっとしたら彼とまちがえていいるのではないか。アワヤとアラノがまちがえられることは、日本人の間でさえしよつちゅうあることなのだ。

私がそう言うのと、デットは、極東軍事裁判とか戦争犯罪、従軍慰安婦などの個別の問題ではなく、そういう問題に対して日本人はどのように考え、それがどのような歴史的な

背景を持つていると考えるのか、歴史家としての意見を私に聞きたいのだ、と言う。そういうことならば、私にもすこしは話ができるかもしれない、と考えて、彼のインタヴューに応じることにしたのだった。そうしたのは、もう一つ、彼に私を紹介したのが、オランダ人の、私より一〇歳ほど若い友人だということもあった。デットもこの友人と同じくらいの年齢だから、おそらく、ライデン大学で、同学年か、先輩後輩くらいの間柄なのだろう。そして、この友人も、母親だったと思うが、かつて日本の強制収容所で痛ましい経験をしており、そのために彼は、オランダの内閣法制局に当たるような部局で働く傍ら、極東軍事裁判の研究もてがけるようになったのだった。それに関してはずでに著書もある。

インタヴューは八月十一日の午後三時から、私の研究室で行った。彼は、夏の旅先などで欧米系の男たちが往々にしてそうであるように、短パン姿で現れた。それから二時間ほど話して彼はあたふたと帰っていった。原稿の最終締め切りまでにあと数時間しかない、というのがその理由だった。そうでなければ、どこかでビールでも飲みながら、大学院生たちの意見を聞くという楽しみに誘うところだった。デットは、記事になるかどうかわからないが、もし記事になったら送ると言っていた。意外に早く、数日後には彼

から新聞を送ってきた。記事になったんだ、と思った。それでこの件は終わり、のはずだった。しかし、その数日後一通の手紙がオランダから届いた。差出人のクレインという名前を見て、たしか私と同分野の歴史研究者に同じ名前の人がいるので、おそらく彼だろうが何の用件だろう、と思ったまま忙しさにかまけて、しばらく放置していた。そして、ほっと気持ちに余裕ができて封を開けて見たのは、もう八月も末の頃だったと思う。手書きの読みにくい文字を追ううちに、差出人が、子供の時に日本の強制収容所を経験し、いまだにそのトラウマに苦しんでいる人であること、デットの記事を読んでわざわざ手紙を書いてくれたことなどがわかってきた。

読みながら私は、これはなかなか得がたい経験なのではないか、とまず思った。次に、この経験を独り占めするのはもったいない、と考えた。そこで、授業で学生諸君に「デットの記事と、その婦人の手紙の翻訳を紹介して、ついでに、彼らの意見も聞いてみることにした。それとともに、本誌に何らかの形で掲載できないかとも考え、史学会会長梅原弘光先生と編集委員会の承諾を得て、「資料と通信」として掲載していただくことになった。以下に掲げるのが、その新聞記事と手紙の翻訳である。

【注】

(1) TROUW は、忠実な、誠実な、貞節な、あるいは正確な、というような意味の形容詞、あるいは名詞を名前に持つ、オランダの日刊新聞。本社はアムステルダムで、読者は知識層を中心とし、紙面は誠実でまじめという評価が定着している。

(2) この友人は、L.ファン・プールヘースト L. van Poelgeest 氏、著書は *Nederland en het Tribunaal van Tokio-Volkerechtelijke polemiek en internationale politiek rond de berechting en gradering van de Japanese oorlogsmisdadigers* Gouda Quint B.V. Arnhem, 1989. すでに以下の日本語訳もある。水島治朗・塚原東吾訳『東京裁判とオランダ』みすず書房、一九九七年。

二、オランダの新聞トロウの記事

『道徳的指針のためにオランダから来た絵画たち』⁽¹⁾

— 二〇〇〇年八月十二日 (土) のコラム「深層」の記事から —

〔要約〕

蘭領インドの占領に関する展示が、日本において、まるで熱いジャガイモのように、巡回を続けている。博物館では、縮小された形ですら、そのままの名前では展示が受け

入れられない。にもかかわらずここ数ヶ月、日本の犯罪に関する写真や絵画、説明文が、町々の小さなホールや私的な部屋を、巡回している。初めて、戦争が終ってからちょうど五五年目に。

〔日本人との〕対決^②

デットレフ・ファン・ヘイスト

東京の彼の家は高速道路の傍にあった^③。非常に暑い。日本人の戦争経験者として知られた大場貞夫^④ Satō Obō(七七)は中で待っていた。彼は兵役義務者として日本の蘭領インドの一部を経験した。彼の顔は、アムステルダムのレストラン国立戦争史料研究所^⑤では、不快な過去を忘れまいとする公平な日本人の顔だった。

大場はかならずしも今日日本を廻っている展示に完全に満足しているわけではない。「しかしそれは先年オランダで見られたもののうちのわずかな部分にすぎません。わずか六分の一の部分が送られて来たのです。しかし当地で見られるものは、当時〔アムステルダムで〕の展示より穏当です。」とりわけ、一九七一年の天皇裕仁のオランダ訪問に関する「微妙な」部分がまったく省略されている。「多くの日本人

たちにとって我々の天皇に対する騒動の写真を見ることは許しがたいことであるにちがいありません。天皇は尊敬をもって扱われなければならないのです。」

強制売春に関するビデオテープもまた「幸運にも」上映されていない。彼にはしかしまだある一つのことが気にかかっている。その展覧会では、三人の死刑に処せられ、銃剣で突き殺されたオランダ人の戦争捕虜たちの絵がかけられていた。「あれはここではかけない方がよかった。もしそれが写真であつたなら、いくらかちがっていたでしょう。しかしこれはおそらく決して起こるはずもないことを描いた絵です。この画家はこの執行の目撃者だったのですか?」戦争経験者の大場はニオッドにこの版画を取りはずすように要求した。もしそれが取り払われなかったならば、いつかは抗議が来るにちがいない、と彼は警告した、と言うのは、リンゴの入った籠では籠全部をだめにするには腐ったのが一つあるだけで十分だからだ。今まではしかし、思ったよりはよい結果になっている〔抗議はまだ来ていない〕。展覧会が開かれた最初の場所、京都では、不協和音は聞かれなかった。長崎市は展示に協力しなかった。長崎のある平和活動のグループはそれがみつともないと考えて、反射的にある部屋を借りることを決めた。このようにして長崎でもなんとか展示が実現した。

綱引きする「戦争責任」(荒野)

大場はどうしてそのようになったか理解できるのか? 「私
が聞くところによると、長崎市はオランダで原子爆弾に関
する展示をしようとした。それに関してあなた方が関
心を示さなかった時に、長崎の市役所では、それならオラ
ンダの展示には協力すべきでないといふ決められたようです。」
なぜ多くの日本人はいつも原子爆弾をひきあいに出すのか?
彼らは自分を犠牲者とだけ見て、加害者と見ることはでき
ないのか? あるいは、爆弾を日本の犯罪の直接的な結果と
して描いてみてもいいではないか。大場は椅子に座り直し
た。「長崎と広島の人々は原爆を真珠湾、中国、そしてイン
ドネシアでの私たちの行動と結びつけることについては嫌
悪感を持っています。と言うのは、因果関係の理論に従っ
て爆弾が正しい解決とされたからです。」

大場もまたその「理論」を拒否する。「原子爆弾のおかげ
で命を救われたと言うオランダ人がいます。私はその人た
ちが、収容所にいた人たちだということがよくわかります。
しかし原子爆弾はどのような事情があっても受け入れられ
ることはできません。私は、私たちが原爆を自らの上に呼
び寄せたのだと言うあなた方の見解を、決して受け入れる
ことはできないのです。」

立命館大学の国際平和ミュージアム^①において戦争のみに
関する展覧会が開かれた。「蘭領」インドの展示のあるホー

ルは無料で公開された。かなり混雑していた。ホールの一
つのもっとも大きな壁は空いたままになっており、すべて
の展示は部屋の中央に据えつけられているパネルのような
ものにおさまっていた。平均的な来訪者は一〇分で見終わっ
ている。

山田美和 Miwa Yamada (一八) は立命館大学で中国語
を勉強している。「私はたしかにインドネシアの占領につい
て聞いたことがあります。しかし詳しくは知りません。た
しかに興味深い展示ですけど。」日本の海外侵略に関する彼
女の意見はこれらの展示によつて変わったのだろうか? 「い
いえ。だって私はそれについてもともと意見を持っていな
かったのですもの。私はどう考えたらいいかまだよく解
りません。」

三原博 Hiroshi Mihara (四〇) と彼の二人の息子たち 昭一
Shoichi (一一) と和樹 Kazuki (七) は、戦争についてもつ
と知るために展示に来た、とすくなくとも父親は言った。
しかし二人の子供たちは退屈のあまり疲れてしまっていた。
父親の三原は京都の協同組合のスーパーマーケットで働い
ている。そして彼は彼の子供たちをいいレールに乗せるこ
とが自分の役目だと考えている。「自由な時間には私たちの
祖国の歴史をよく読みます。海外での戦争、それを私はあ
まり知りません。それは私たちの歴史のまづい部分です。」

もし私がそれを子供たちに隠したままにしていたら、私は悪い父親です。」

三原博は三人の突き殺された戦争捕虜たちの絵を丹念に見た。彼はこの絵に腹をたてる日本人がいるなどということが想像できるだろうか? 「あなたがそう言うのなら、うん、おそらく」「そういうことがあったのでしょうか」、しかし、もしそういうことが起こったのなら、それもまた展示されるべきです。そのような種類の犯罪の写真が撮られたことは、まあ一度もなかったでしょうね。」

〔蘭領〕インド展が催されているホールの隣部屋で、平和の合唱団が莊重な歌を歌っている。約五〇人ほどの、ほとんどが年とった、関心を持っている人たちが、安楽椅子にゆったりと座って、聴いている。ホールのカーテンで仕切られた部分に、多くの注目を惹いた爆弾がある。爆弾の傍の説明版には、その容器は、広島を壊滅させた原子爆弾「小僧 Little Boy」の忠実な複製ということが書かれている。壁には原子爆弾の犠牲者たちの恐ろしい絵がかっている。ホールにおいて〔蘭領〕インドでの日本の侵略に関してつくりだされたイメージを、あたかも博物館の責任者が、ふたたび矯正しようとしているかのように。すなわち、私たちもまたこの忌まわしい戦争における他者の残忍さの犠牲者なのだ、私たちはすべて同じ小船に乗っていた

のだ、と。

髪を後で束ね、スーツをきちんと着た一人の男が、リュディ・コウスブルク「東インドの収容所症候群」の日本語訳を、ばらばらとめくりながら見ていた。展示は彼を失望させた。「何の脈絡もない。彼らはこの展示で何を言おうとしているのでしょうか? それがまったく漠然としすぎています。日本人がオランダ人にしたことをもつとはつきり示さない。なぜそれが日本人に、遠慮がちに知らされなければならぬのですか?」彼は柵屋興真 Koshin Masuya (五七) といい、ある神道集団のリーダーらしい。彼の名刺によれば、彼は京都の華頂山普蔵寺 Kachozan-Fuzoji Heilighdom の上席の神主だ。

なぜ柵屋は来たのか? 「私はこういうオランダの展示がどのようなものかを見たいと思いました。オランダは四〇年間私たちの教師でした。オランダ人たちは私たちに医術を教え、外の世界がいかに互いに苦しめあっているかを教えてくれました。」しかしこのこの展示では日本人たちは何ひとつオランダ人たちから教えられない、と彼は考える。日本の歴史の教科書には、蘭領インドで天皇の軍隊が犯罪を犯したということは書かれていない、と神主の柵屋は言った。

「子供たちのために、私たちのかつての犯罪について明ら

綱引きする「戦争責任」(荒野)

かにすることは重要です。日本の子供たちは甘やかされて育ち、彼らは「教育しようがない」、と彼は考える。彼にはそれが解る、彼は三回結婚して、八人の子供の父親なのだ。「日本は道徳の指針を必要としています。誰かが私たち、とりわけ私たちの子供たちに、いいことと悪いことを区別することを教えなければなりません。日本人たちはあの世で生前に彼らが犯した罪を罰する神を持っています。たとえ私が、私たちは墮落していると言っても、誇張しているわけではありません」と神道の聖職者は言った、「まあここを走り回っている行儀の悪い子供たちをご覧ください。」

二人の少年が、はしやぎ、じゃれあいながら駆けて行き、ちょうどその直後に、日本語の説明板が「ガシャン」と一壁から落ちた。神主は憂鬱そうに、このような展示の有効性について自問する、「私たちがどのように、また、どれほど多くこのような展示を催そうとも、歴史は繰り返します。人々は決して学ぼうとしないから。」しかし九日間に五千人の人々が展示を見に来た。この人たちはたしかにまさに過去から学ぼうと思っているのでは？「彼らはそうです。しかしその人たちはすでにあなた方の植民地で私たちがどのような罪を犯したかを知っている人たちなのです。この人たちは彼らの意見を裏づけるために来るのです。しかしこの展示を見るべき日本人たちは、家にいます。私たちが戦

争でしかしたことを知らず、また知ろうともしない人々はこの頑固な人たちなのです。」

彼の部屋には本が乱雑に置かれている。本がない唯一の部分に鳩時計がかかっている。東京にある立教大学の日本史の教授荒野泰典(五三)は、日本の歴史家は「重い責任」があると考えている。「私たちは私たちの歴史の暗い面を描かなければなりません、私たちは日本人に私たちの国がしたことを教えなければなりません。」それは簡単な仕事ではない。すべてを「都合のよいように」言いつくろう、日本における、いわゆる「修正主義的な学派」⁽¹⁰⁾に対する闘いは、無駄骨のように見える。荒野は、言(く)わ(れ)ない人々 *goedpraters* に反論する本に分担執筆した。その本は一万部売れた。ナシヨナリストで、ほとんどすべてについて日本人はすばらしいと考える、西尾幹二教授の修正主義的な本『国民の歴史』⁽¹¹⁾は、それよりもかなりよく売れている。すなわち、その本は六〇万部以上が店頭で売れた。若い日本人たちはますます戦争の歴史を嫌悪するようになってきている。

「彼らは恥じ、罪を感じなければならないということに飽きあきしています」と荒野は言う。「より古い世代は戦争はある意味で不可避のものだったと考えています。つまり、戦争は彼らの目にはよくも悪くもなかったのです。私の父もまたそのように考えています。」日本の過去に対する外国

の批判に飽きあきしている日本人がますます増えていることは、したがって彼を驚かせはしない。「いったいいつ戦争は終るのだらうか、そう多くの日本人は思っています。しかしそれは、私たちが勇気をもって自分のあやまちを直視した時に、本当に終るのです。そのためには自己を反省することが必要であり、それはまだ不十分です」と彼は言う。「ドイツ人は彼らの過去をしつかり直視しました。しかしそれはそうせざるをえなかったからです、というのは、ドイツ人たちはそう意識しないかぎりヨーロッパで生きて行けなかったからです。」

日本はそれに対して、隣人との関係を考慮せず、他者の感情に配慮しないでも、十分生きて行ける島国だ。⁽¹⁾「私たちの隣国は私たちに正気と後悔を強制することができなかった。」それ故に、死臭は、死体が適切な方法で地中に埋葬された時にまさに棺桶から消えるのだ、ということに日本が気づくまで、長く続くのだ。

【訳注】

(1) 道徳的指針のためにオランダから来た絵画たち。原語は *Prenten uit Nederland voor het moreel kompas*。これが、この展示のオランダ側の名称である。なお、この記事は、「深層」

というコラムに掲載された。「深層」の原語は *de Verdieping* で、深化とか、一階二階の「階」にあたる単語だが、この場合は、あるできごとの表面下にある真実や意味を探るというような解釈にもとづき、とりあえず、このように訳しておいた。

(2) 対決。原語は *Confrontatie* で、対面とか対決という意味。記者が独自にインタヴューして書いた取材記事なので、このような表現になっているのだと思われる。ここではその意をとって、このように訳しておいた。

(3) 文章の時制は現在形で、いわゆる歴史的現在の手法で書き進められている。翻訳に当たっては、読みやすさも考慮して、適宜過去形にしたところもある。また、訳文中の二つのカッコ、「」と「」は、それぞれ原文中の記号を、それらに置き換えたもので、「」は、訳者が適宜補った語句や文章であることを示す場合に、挿入したものである。

(4) 日本人の人名と寺院名など固有名詞の漢字は、すべて訳者が、仮に当てたものである。

(5) オランダ国立戦争史料研究所(ニオッド) *het Nederlands Instituut voor Oorlogsdocumentatie (NIOD)* は、一九四五年オランダ政府によりアムステルダムに設立され、九七年に現在地に移転し、九九年に王立芸術科学アカデミーの一部門となつて、名称も、それまでの *Rijksinstituut voor Oorlogsdocumentatie (RIOD)* から現在のものに変えられた。第二次大戦のみでなく、広く戦争と戦争史料全体について研究する機関として発展している。同研究所が所蔵する日本関係史料等の詳細については、文部省科学研究費(平成九―十一年、基盤研究A)による『在欧日本史料の所在

網引きする「戦争責任」(荒野)

と現状に関する調査」研究報告書」(研究代表者高木俊輔)を参照のこと。

- (6) 天皇は国際的には「皇帝」を意味する *keizer*、あるいは *emperor* の名で呼ばれる。近世においてオランダ人は、徳川將軍を「皇帝」*keizer* と呼んでいたが、それは、ローマ法王を連想させる「精神的な皇帝」である天皇に対して、世俗の支配者としての「世俗の皇帝」としてだった。この問題については、とりあえず、荒野泰典「二人の皇帝—欧米人の見た天皇と將軍—」(田中健夫編『近代の日本と東アジア』吉川弘文館、一九九五年)参照。また、徳川將軍が外交権を失い、天皇が外交の主体として立ち現れてくる際の国際的称号が、「天皇」*Tennou*ではなく、「皇帝」*Keizer* *Emperor* に確定した経緯については、杉本史子「天皇」号をめぐって『歴史評論』四五七号、一九八八年)を参照のこと。

- (7) 原語は、*Kyoto Museum voor Wereldvrede van Ritsumeikan-universiteit*。

- (8) リーティ・コウスブルク *Rudy Kousbroek* の著書の原題は *Het Oostindisch kamppindroom* だ。原本も日本語訳も、筆者未見。

- (9) 華頂山 (*Kachozan*) というのは、京都では知恩院のある辺りだが、フゾージという寺は見当らない。また、寺に神主がいるというデットの説明にも、仏教と神道の混同があるように思われる。記事を読むかぎりでは、マスマス *Masuya* という人物は新興宗教系の宗教者のようにも思える。

- (10) 修正主義的な学派 *revisionistische school*。藤岡信勝氏(東京大学教授、教育学)を中心として、日本の歴史を明るく見直そうとする、いわゆる「自由主義史観」のグループ

のことを指す。

- (11) 「教科書に自由と真実を」連絡会編『徹底批判「国民の歴史」』大月書店、二〇〇〇年。なお、私はこの中で「東アジアへの視点を欠いた鎖国論」を分担執筆している。

- (12) 原文は *Geschiedenis onzer natie*、新しい歴史教科書を作る会編・西尾幹二著『国民の歴史』産経新聞社、一九九九年。

- (13) この表現には、記者デットの誤解が含まれているので、訂正しておきたい。デットは日本が「島国」であることから、直接、「他国との関係の顧慮せず、他者の感情に配慮しないでも、十分に生きて行ける」と書いている。たしかに日本は島国であり、私もそのことは否定のしようがないと考えている。しかし、島国だから周辺の国々との関係に顧慮しないでも生きて来られたというのは正しくないし、私の年来の主張にも反する。かつて「鎖国」と呼ばれた近世の体制も、周辺諸国との関係を平和で安定し、かつ秩序だったものにするこゝとによって国内の平和を維持するという政策の意図にもとづいて形成されたものだった。ヨーロッパの諸国のように、あるいは中国と陸続きだった朝鮮やベトナムなどと較べると、伝わり方に若干の時間差はあるし、偏差も大きいのが、日本の動向とその周辺の地域の動きは、密接に関わりあっていた。そのことは、なによりも当事者たちがつねに、多かれ少なかれ意識しており、そのことによって、近世のあの体制も一九世紀の後半まで維持され得たのだった。島国ということと、閉鎖的、あるいは停滞的、独善的というようなイメージとを結びつける先入観は、まず、払拭する必要がある。なお、戦後の日本とドイツの生き方が、「戦争犯罪」に関してはまっ

たくちがつてしまった理由について私がどのように考えているかについては、次の、オランダ老婦人の手紙を紹介した後述べよう。インタヴューでは、この問題については、ややこみいった説明をしたので、デットにも理解しにくかったのかもしれない。もつとも、割くことができる紙幅と、記事をまとめるための時間の余裕の問題もあったのかもしれない。

三、あるオランダ人老婦人からの手紙

— 新聞記事へのある反応 —

〔住所等略〕

拝啓 荒野泰典教授

トロウ（オランダの新聞）紙上でデットレフ・ファン・ヘイスト（新聞記者）が、日本歴史のために、その暗い面（例えば第二次世界大戦における侵略）についてよく考えることが必要であるとのあなたの考えについて報じていました。

子供の時に私はある日本の強制収容所
a concentrationcamp (アムバラムBARAWA) で育

史苑（第六一卷一号）

ちました。私の健康はそこでひどく損なわれました。私の父はビルマ鉄道 the Birma railroad で働き、彼もまたそこで「健康を」非常にひどく損なわれました。私は自分の過去のトラウマに耐えるためにたくさんのお金を勉強してきました。そしてそうすることで、第二次世界大戦に至るまでの日本の歴史の背景に関心を持つことができました。K.G. ファン・ウオルヴェン van Wolven²の著書が私に、戦争前の政治情勢についてより多くの知見を与えてくれました。そして一般的に言って、まったく異なった姿勢、それが西洋的な観念である「罪」について、日本の人々に奇妙な感じを与える「ということも理解しました」。戦争の残虐行為が、あたかもそれが存在しなかったかのように、日本の歴史から遠ざけられることは、私にとって非常に苦痛でありました。最終的に私は、戦争における日本の過去の侵略が、それらが認知される過程でいつかは明らかにされるにちがいないとの希望を失いました。隠された罪ほど悪い罪はありません！

私は、すべての国が（そしてすべての人が）暗い面を持っていることを知っています。私はまた、人間としても、人は、自分自身から逃げている大人になれないということも、知っています。そして人はまたふたたび同じ「過ち」

綱引きする「戦争責任」(荒野)

に身を投じることになるのです。このことは国にも同じようにあてはまります。

ナチズムの背景について警戒することがより深い知見を生みだします。哲学者ポッパ―Popperは彼の著書「開かれた社会の敵 The enemies of the open society」のなかで、より孤立した立場(例えば、島)にある国々の、自らをまつりあげたり、他を犠牲にして自分自身を賛美する危険な立場になる傾向をとてもよく描いています。この孤立した立場は政治的、もしくは、歴史的、もしくはは地理的、その他なんでもありえます。

どのような理由でも、もしあなたが、例えばアムバラワについてのより立ちいった情報を必要とされるならば、私は喜んで私のよく知っていることを書き送ります。

私は、日本における修正主義的な傾向がいまだに、ますますはびこっているなかで、あなたがとられているスタンスに心から感謝したいと思います。

あなたが英語で書いた本はありますか？

私は当地の書店であなたの本を一冊求めることができますか？

「あればその」書名を教えてもらえませんか？

私は、死ぬ前に日本人の心からこの声が聞こえてきたこ

とにととても感謝しています。

あなたとあなたのお仕事に幸多からんことを。 敬具

ティーンケ・クレイン Tienke Klein

【訳注】

(1) アムバラワ。中部ジャワの中心都市スマランの南にある。その位置、および、ジャワの強制収容所の概略については、内海愛子『朝鮮人BC級戦犯の記録』(勁草書房、一九八二年)を参照されたい。アムバラワは、朝鮮人軍属たちが反乱を起こした場所でもある。なお、手紙の主の父親が働いたという「ビルマ鉄道」は、いわゆる泰緬鉄道の建設工事のことだと思われる。この工事に、インドネシアで捕虜となったオランダ人たちが送られたことや、そのほか東南アジア各地の捕虜収容所の実情についても、内海愛子前掲書を参照。

(2) 筆者未見。

(3) 筆者未見。

四、おわりに

ここでドイツと日本の戦後の生き方がちがって来た、つまり、ドイツは十分に謝罪し、歴史教育においてもその反省を十分に生かしているのに対して、日本がそのような方向を取らなかった、あるいは、取れなかった理由についての私見を述べて、このレポートを締めくくことにしよう。

「ドイツ、イタリアと比べて、日本における戦争責任問題の取り組み方はきわめて不十分である。天皇の戦争責任を不問に付したことから、日本の国家としての責任を明らかにすることがほとんど行われなかった。そのことはアジアの被侵略国に対する加害の責任を頼かむりにしていることに通じている。」⁽¹⁾これが一〇年前の、日本、および日本人の戦争責任に関する一般的状況だったと言ってよいだろう。しかし、九三年には細川護国首相が、「過去の我が国の侵略行為や植民地支配など」について「改めて深い反省とおわびの気持ち」を「公式に表明したことに見られるように、状況は変わりつつある。歴史における天皇の問題などについて本格的な検討がはじめられたのも、日本の歴史教科書における侵略問題の扱い方などに対するアジア諸国の批判に答えようとするのが、主要な動機の一つだった。このことは、日本においても、環境さえ整えば、この問題に対する

しっかりした取りくみがなされることを示しているのではないだろうか。かならずしも、日本人は、ドイツ人などと比べて、ものごとをあいまいなままにすませる傾向があるとか、倫理性が弱いとかいうような、実体的ない「国民性」で語れるような問題ではないのではないか。とすれば、この問題は、戦争責任問題への取り組みがなぜ不十分なのかではなく、なぜ、戦後半世紀近くもあいまいなままにすまされてきたか、という風に問い方を変えてみる必要があるのではないか。

それは、なぜこの時期になつて、首相が反省を口にするまでになつたのかということと裏腹の関係にある。それは他でもない、侵略を受けたアジア諸国の批判を避けたり、無視したりできなくなったからだ。その理由は、大まかに言つて二つある。一つは、日本が「経済大国」化し、これらの地域との経済的・政治的関係がより緊密なものになるとともに、これらの国々が着実に力をつけてきたこと。もう一つは、八九年以来の冷戦構造の解体により、日本もアメリカ合衆国の言いなりで国際関係を乗りきることではできなくなり、相対的にアジア諸国との関係を重視せざるをえなくなりつつあること。いいかえれば、日本を巡るアジア諸国との国際関係が、それなりに独自の意味を持ち、成熟してきていることが、その背景にあるということになる。

綱引きする「戦争責任」(荒野)

ひるがえって、戦後から七〇年代ぐらいまでを見れば、例えば、アジア諸国は、欧米諸国の植民地状態から脱け出し、国民国家として成熟するための苦闘が続けている状態で、とても日本の戦争責任を問える状態にはなかった。極東軍事裁判、いわゆる東京裁判においても、「アジア」の不在は誰の目にも明らかで、それが、連合国側、特に、合衆国の、冷戦をにらんだ戦後処理を可能にし、それが七〇年代後半にまでいたるアジアの政治的・経済的混乱の一因ともなったのだった。私がデットのインタヴューの際に、「私たちの隣国は私たちに反省を強制する力を持たなかった」という意味のことを言ったのは、そのような、すぐれて、戦後から現在にいたる、日本とアジア諸国との国際関係のあり方を念頭に置いてのことだった。言いかえれば、今になってようやく、合衆国などの思惑にとらわれることなく、真摯にあの戦争の責任やそれに連なる歴史的責任を振りかえり、反省することができるようになったと言えるのではないか。ずいぶん遅れたけれども、時間が経ったからといって、かつての被害者たちがその痛みを忘れてしまったわけではないことは明らかだし、その作業が、私たち自身の歴史を見る目をただすすよりもなることもまた疑いのないところだからだ。

【注】

- (1) 藤原彰「序に代えて——サマーセミナーの二十年——」藤原彰他編『現代史における戦争責任』青木書店、一九九〇年。
- (2) 吉田裕他編『敗戦前後——昭和天皇と五人の指導者——』青木書店、一九九五年。
- (3) 荒井敬一「戦争責任と戦後処理」前掲注(1)書、所収。

(本学教授)